



「防災活動」とは社会的に必要な活動です。しかし眉間にしわを寄せて難しい顔で難しい話。それで人は本当に集まるのでしょうか。災害が多発する昨今、防災に興味のある方なら少しは耳を傾けるでしょう。でも実際にはどうでしょうか。多くの人が行き交う駅前のような場所で防災を語ったとしても、足を止めて聞き入る人はほとんどいらっしゃらないでしょう。大抵の防災講演会を見てみると、そこには「おやすみなさい」と眠っておられる方が多いのには驚かされます。しかし聴講者が眠たくなるのは、聞き手側の責任ではなく、伝え手側の責任なのです。面白いドラマや映画を見て眠る人は少ないはずです。ましてや漫才やお笑い番組を見て眠たくなる人はいません。地域防災の主役は一般市民です。その人達に防災を伝える為には、ワクワクするような楽しさと興味をそそる伝え方が重要なのです。

さて、我々のまちを防災活動へと方向付けたコンセプトがあります。それは「防災を防災と語らずとも防災の役割を果たすこと」これにより地域防災力を向上させることができました。また阪神・淡路大震災以降 22年間継続できた秘訣には「生活防災」の啓発があります。(生活防災：京都大学防災研究所・矢守克也教授発案)

生活防災の基本は、「自分のできることから・関心のあることから始めること」であり、防災を他から独立させた活動にしない生活密着型とすることです。仕事・家事・勉強・趣味・お祭・イベント等、普段の生活に防災をうまく組み込むことで、防災を自分の生活習慣から引き離さないようにする仕組みができあがるというものです。非日常的な災害の為だけの活動とした場合、どうしても継続し

た活動にはなりません。日常習慣に組み込み、日常生活の利便性に置き換えることが大切で、特殊なことをする必要もなく、日常を犠牲にする必要もないのです。

我々の活動は、継続することでチームを少しずつ大きくし、そのチームの中で個人が持つ情報の共有を図ることで、個人のスキルをチーム全体のスキルへと反映させていくシステムを構築しました。それが特技登録制度「ちからこ部(旧名：町内チャンピオンマップ)」です。緊急時や災害時に何をすべきか、誰に何を応援してもらおうのかといったものを、災害が発生するまでの余裕のある時間に登録して頂き、災害発生時には短時間で適切な人に協力を要請する、日常の中では適切な助言頂けるシステムを構築しました。しかしながら思ったように協力者は増えなかったのです。

ある日、「防災とは何なのだろう」という原点回帰のような疑問が浮かび上がります。更には「何故、防災活動を行わなければならないのか」という壁にぶち当たりました。それは小学生からの質問「防災をひと言で説明してください」だったのです。

防災活動を行うことは当たり前のことだと思っていた我々は、防災をひと言で説明できないことに気づきました。防災を推進啓発する我々が、地域の方に説明できないなどあってはならないことです。そこで「防災とは何だ」「何の為に防災活動をするのだ」という議論を徹底的に行い、その結果、生み出されたのが「防災とは自分の大切な人を守ること」「その為には自分も死なない対策」共に生き残る活動をしようとなったのです。

自分の大切な人とは、仕事や生活の中で別々に行動することが大半であり、24時間365日守り抜くのは不可能です。家族を残し仕事に

出かける、その時に大災害に遭遇した場合、大切な家族は誰が守ってくれるのか。そこで自分のバックアップをつくろうと考えました。それは「近所の人を頼る」ということ簡単なことだったのです。普段、近所付き合いがない人に災害が発生したからとはいえ、そんな時だけ頼り頼られるのは虫の良い話です。その為に普段からお互いに挨拶をして、顔見知りになり、更には地域コミュニティに参加することで自分のバックアップづくりができると啓発したのです。そこには「あいさつ運動」の推進が大きな力となりました。

どこの誰か判らない人を助ける為の防災活動と云う漠然としたものではなく「自分の大切な人を守る」その為に防災活動を行うのだと「定義」したのです。すると今まで迷いながら行ってきた防災と云う凝り固まった概念を見事にぶっ潰すことに成功したのです。

いくら日頃の生活に防災を組み込むと考える、従来の防災活動からどうしても抜け出せないものです。しかし「何でも防災活動にしまえば良いのだ」と考えたとき、これもあれも防災になるぞと気付きました。そうすると協力者も一気に増えチームは加速して大きくなりました。その時「コミュニティこそが本当のライフラインだ」と気付いたのです。

例えば、楽しい防災活動として大阪名物イカ焼き（お好み焼き）を炊き出し手法に取り入れました。イカ焼き機は上下に熱源があり短時間のプレスで焼き上がること、停電時冷蔵庫内の食品に短時間で火を通し少しでも長持ちさせることができる等の利点から導入を決定しました。イベントごとに使用することでイカ焼き機の扱える人を増やし防災力の向上を図ることと、地域のみならずイカ焼きを楽しみにしているという笑顔と防災のコラボレーションです。また、子どもとはスポーツ観戦会を通して防災活動の継承や、大人とは趣味を活かした園芸部やゴルフ部の運営、世代を超えてみんなが憩える防災井戸設置等、

楽しみながら防災活動を担えると云う継続可能な生活防災文化ができあがり、防災を防災と語らずとも防災の役割を果たすことができます。



イカ焼き



防災井戸

詳しくは、加古川グリーンシティ防災会のホームページをご覧ください。

http://www.greencity.sakura.ne.jp/greencity_bousaikai/



加古川グリーンシティのホームページ